

のぶよ
片柳 展代 さん
(出流原町)

○プロフィール

(公財) 佐野市民文化振興事業団評議員 / 佐野市文化財保護審議会委員 / 佐野ルネッサンス鑄金展実行委員会委員 / 元足利家庭裁判所調停委員 (最高裁判所長官表彰・藍綬褒章受章)



キラリ★
話題の「ひと」

よみがえった「日の出椿」

今 江戸時代の終わりのお話

から200年ぐらい前
です。そのころ佐野は約半分が彦根藩の領地で彦根藩主井伊直弼が治めていました。直弼殿様が日光・東照宮をお参りした帰り道、佐野の検分のため出流原の名主の神山家にお泊まりになりました。次の朝雨戸を開けると、昨夜もてなしを受けた茶室の前の庭に朝の光が差し、朝日に照らされ満開に咲いた見事な椿の太木が目に入りました。しばらく眺めていた直弼殿様は『日の出椿』と呼んではどうか。その言葉に当主の神山吉助は『日の出椿』と名付け大切に育てました。(作・北岡豊子さん・片柳展代さん「よみがえった『日の出椿』より」)

出流原町の民家にあつた大老井伊直弼が命名したといわれる樹齢5〜600年の椿は、昭和48年に市の文化財に指定されましたが、平成30年に枯れてしまいました。片柳さんは地元の有志と地域の文化遺産継承のため「日の出椿」二世を育てる会を立ち上げ「日の出椿」の挿し木2株を出流原小

学校へ移植しました。また「佐野ふるさと民話の会」の北岡豊子さんと一緒に「日の出椿」の民話を作成しました。「日の出椿」の名付けの由来、佐野の歴史、枯れてしまった椿が地域の人たちによってよみがえったいきさつが書かれています。そしてそのお話は出流原小学校の6年生が紙芝居にして毎年3月に1年生に読み聞かせをしているとのこと。

片柳さんは「今回のこの取り組みが、後世に文化財を残そうとする一つの見本になつてもらえると嬉しいです」と目を細めていました。命のバトンをつないだ「日の出椿二世」は移植後2本そろつてかわいいピンクの花を咲かせています。これからも地元の人たちが、出流原小学校の子どもたちに見守られながら美しい花を咲かせ続けることでしょう。

(市民記者 中里聖子)



▲読み聞かせをする
出流原小学校の6年生

市長からの
メッセージ

メッセージ

先月、本県にとって42年ぶりとなる、第77回国民体育大会「いちご一会とちぎ国体」と第22回全国障害者スポーツ大会「いちご一会とちぎ大会」が開催されました。参加された選手・関係者の皆さまは大変お疲れさまでした。本市では、ラグビーフットボール全種別とバレーボール成年男子、バレーボール(精神障害の部)の試合が開催され、大いに盛り上がりました。私も何度も足を運び試合もたくさん見させていただきましたが、ラグビーフットボール少年男子1回戦で栃木県代表が兵庫県代表に大逆転トライを決めて勝利したときの興奮は今でも忘れられません。やはりスポーツの人を惹きつける力というものはとてもない力があると、改めて実感させられました。今大会は新型コロナウイルス感染症が拡大してから初めて開催された国体となりましたが、今後も少しずつではありますが、人の集まる大きな大会、そして海外からのインバウンドも広がりを見せていくと思います。そういった中で、好機を逃さずに進められる準備や現時点でできる各国大使とのビジネスマッチングなどはすでに始めております。本市にはクリケットはもちろん、その他のさまざまなスポーツやイベントを開催できる佐野市国際クリケット場があります。先月もいろいろなイベントが催されましたが、クリケットでは「ICC男子T20クリケットワールドカップ東アジア予選」が開催され、東アジア各国から選手や関係者の皆さんが集まりました。クリケットはスポーツであるとともに、本市における海外との経済交流の懸け橋となるものです。海外との往来が本格的に再開した際には、本市の関係するさまざまな方達と協力し、地域経済の発展にしっかりとつなげていきます。今冬は季節性インフルエンザと新型コロナウイルスが同時流行する可能性があるというニュースもありますので、十分に気を付けてください。

金子 裕

今回の表紙 「いちご一会とちぎ国体が開催」 令和4年10月10日撮影

佐野市では、ラグビーフットボール全種別とバレーボール成年男子の試合が開催されました。大会期間中は、選手による熱い戦いが連日繰り広げられました。





6年ぶりに国際交流フェスティバルが開催

第 26回佐野市国際交流フェスティバルが、10月16日(日)、郷土博物館駐車場を会場に開催されました。同イベントは、通常は隔年開催されているものですが、近年は新型コロナウイルスなどの影響により中止が続いていたところ、今回6年ぶりに開催となりました。

当日は、エイサーやフラダンス、パラグアイの歌と踊りなど、一日を通して多彩なステージが披露されました。また、ベトナムやペルー、スリランカなど、世界各国の料理や雑貨も出店され、参加者はさまざまな国の文化を楽しんでいました。同イベントの主催者である市国際交流協会の蘆原進会長は「6年ぶりに開催できて大変嬉しい。このイベントを通して、外国人と日本人の相互理解が進み、お互いの交流が活発になることを期待しています」と喜びを語ってくれました。



ゼロカーボンシティさのキックオフイベント

10 月7日(金)、市文化会館で「ゼロカーボンシティさの」キックオフ・イベントが開催されました。国は2050年までに「温室効果ガス」の排出を全体としてゼロにする「カーボン・ニュートラル」を目指すことを宣言しています。このことを受け、脱炭素社会の実現に向け「2050年二酸化炭素排出実質ゼロ」に取り組む「ゼロカーボンシティさの」を表明するキックオフ・イベントを本市が開催したもので、当日は記念講演やセミナーなどが行われました。「カーボン・ニュートラル」を達成するためには市民・事業者・市が一丸となって取り組んでいかなければなりません。皆さまのご協力をお願いします。



佐野弁
ばんざい

予期しないことが起ることを
テンズケという

「一概に」という共通語があります。これはひとくちに、ひっくり返ると意味で「一概に黒だとも白だともいえない」のようにいます。「一概に」は、文末に「〜でない」という打ち消しの語を伴うのが普通です。「一概に」は訛って、イチゲニといいますが、意味は共通語と全く同じで「うそをつくこと」はイチゲニ悪いとはいえない」のように、文末に打ち消しの語を伴います。

ところが、同じイチゲニでも意味の異なるものもあります。そのイチゲニは「物や動物」などが少し間をおいて、あることがいつせいに(一度に)起こすような様子をいいます。文末に打ち消しの語を伴うことはありません。

では、イチゲニはどんな場面で使われるのでしょうか。具体的な例を挙げてみましょう。

「奥山に降った豪雨が流れ出したようだから、コンダ(今度)は田んぼや畑にイチゲニ流れ込むダンベ」

ところで、突然に、いきなり、だしぬけにという意味の方言にテンズケがあります。これはイチゲニと意味の似ていることばです。テンズケは「人」が、なんの前触れもなく(予測する間もなく)突然に起こす様子をいいます。テンズケという方言は昭和のころまで、日頃よく聞かれましたが、今では聞くことも少なくなり、若者にはめずらしい方言になっていくようです。

「オツツケ(将来)なんになる(職業は?)って、テンズケ聞かれてもよく分かんねえな」

(市民記者 森下喜一)

